

〈論文〉

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

—— 詩の中の永遠 ——

宮 下 克 子 (南山大学非常勤講師)

序

ボルヘスは「永遠の歴史」の中で、「プラトンを永遠の概念の淵源とするつもりはないが、永遠をめぐるギリシアの概念の一切が眩ゆいばかりに拡大され、要約されて彼の著作の中に集合している」と書いている。エレア学派は非有（現象の世界）を否定し、有（一にして全なる根源的なもの）のみがあるとした。時間性、空間性を滅却した、変転を許さぬ全き一者である。ヘラクレイトスはエレア学派において分離されていた根源と現象界とを生（生成）によって統一しようと試みた。全ての物は、永遠の流れ、不断の運動と変転のうちであり、不変というものはない。変転生成の過程だけが永遠である。プラトンはエレア学派とヘラクレイトスから学び、ソクラテスの概念を作る方法を借りて彼自身の永遠、アイデアの永遠に至った。

プラトンのアイデアは静止したものであったが、アリストテレスのアイデアは可能的なもの（ディナミス）から現実的なもの（エネルゲイア）への不断の運動によって永遠に産出される存在となった。そしてアリストテレスはこの運動の始源を「第一に動かすもの」として絶対的な神的精神に求めた。この神的精神は、それ自身はいかなる生成も必要とせず、自らはあらゆる生成の始源となる永遠なるものであった。

ストア学派の永遠は汎神論である。世界の万物は神から現れ出て再びそのうちに消え去るという不断の生滅を繰り返している。神、すなわち全体のみが常に新しく自分を産出する永遠の存在である。

新プラトン主義の代表者プロティノスは世界を何ものによっても規定されない本源的一者である神の放射、あるいは流出と考えた。本源的一者の直接の反映であり、本源的一者に次いで最も完全な理性は、自分のうちに不変のアイデアの世界を含んでいる。それは純粹不滅の叡智界である。そこには過去もなければ未来もなく、ただ永遠の現在があるのみである。それは真の永遠であり、時間はその模像である。

キリスト教的永遠は三位一体説によって説明される。「父」による「子」の産出と、その二者による聖霊の発生の過程が時間の中で起こったことではない、という解明は過去・現在・未来を一挙に消し去った。また、ここにおいて、永遠は神の無限の叡智の属性となった。神は一切の事象を知っておられる。神の永遠は、この充満した世界の全ての瞬間の全ての事象を一挙に記録する。

アウグスティヌスは、神は存在の充満であり、神にとってはまだないものではなく、もうないものもない、神の永遠の今は過ぎ去ることを全然知らない完全な現在そのものであるとした。またアウグスティヌスは、ただ心の中にのみ過去も未来も現在の中に入りうると書いている。この三つの時間はそれぞれ「過去のもの現在の」、「未来のもの現在の」、「現在のもの現在の」と呼ぶのがふさわしい。心の中において、過去のもの現在のは記憶であり、現在のもの現在のは直覚であり、未来のもの現在のは期待である。

またホップスは「リヴァイアサン」の中で次のように書いている。永遠というものは、時間が終わりも始まりも無く継続することではなく、流れ去ることのない不動の「今」ということである。すなわち、「今」と「あのとき」との間に区別がないのである。

近世においてはスピノザが万物の実体である神としての永遠を提示している。実体は唯一絶対であり、あらゆる限定と否定を排除する。この普遍

的存在である無限の実体が様態として特殊化され個々の有限の事物に現れ出る。この実体は全ての有限な存在を貫く一つの存在であり永遠である。

ライプニッツの実体はスピノザのそれと異なり、それ自体能動的な力を有した個々の無数の物でありモノイドと呼ばれる。モノイドは各々が一つの宇宙であり、各々のうちに世界全体に今起こっていることのみか、今までに起こったこと、これから起こるであろう全ての姿が映されている。つまりそこには、過去・現在・未来がある。

カントは時間は観念性であり、不可知の物自体が唯一の実在性であるとした。真に本質的なものは、不変に「永久の今」の中にあって確固不動である。この最高の本質としての存在、全てを包括する存在は哲学の知識の及ばぬところにあり、証明することも理解することもできない。

フィヒテ以降のドイツ観念論では、絶対的な神的創造者のうちに永遠が見出せる。フィヒテは徹底した主観的観念論の立場から、ただ自我のみがあるとした。本源的に存在する実体はただ一つ、普遍的な自我のみである。後期のフィヒテは客観的汎神論に傾倒していく。絶対者、すなわち神が自我に代わって彼の哲学の唯一の原理となった。全ての人間は唯一の生命の泉である神に帰する。個々の人間が自己を完全に絶滅するとき、神のみが残り一切となる。神のみが永遠に一つである。

シェリングは主観でもなく客観でもなく両者に共通の根元であり統一である不変の同一性としての絶対者を考えた。現象する自然は永遠の仕方である存在しているものを段階的、継承的に表現している。そこにおいて、絶対者の全体を認識することができる。シェリングはスピノザ主義的時期、新プラトン主義的時期等を経て、最後には宇宙の発生と歴史とを神の概念の三つの契機、存在しうるもの(主体性)、可能の要素を含まない純粋な存在(客体性)、その合一による絶対的に存在するものの統一の過程で把握しようとした。

ヘーゲルは普遍者のみがあるという絶対的な観念論をめざした。理念以上理念以外のものはない。宇宙は理念が非現実的な抽象でなくなるために

自己を展開して多様な形態となった実在であると考えた。ヘーゲルのこの絶対者は存在ではなく発展である。普遍は自らの抽象性を否定して独立的な実在へと進むがこの実在は思考する過程のうちで再び普遍性へ復帰し、より高い観念的統一に至る。またヘーゲルは「時間の差異は過去も未来も包含している恒常なる現在に還元せられる」としている。真の現在は時間内に内在する永遠である。「現在のみがあり、前と後は無い。具体的なる現在は過去の結果であり、未来を孕むものである。したがって真の現在は永遠である。」

キルケゴールは「永遠なる至福の待望」と「神の不変性」を説き、時間を神の前に停止させようとした。時間と永遠とが互いに接触するのが「瞬間」においてであり、キリスト教的な理解によれば、瞬間とは、時間における永遠なるものの反射、「時間を停止せしめんとする最初の試み」であった。

ショーペンハウエルにおいては、本源的な実体は「意志」である。世界は万物の本質である一つの意志の現れである。意志は先ず、客観化の形態としての理念（イデア）の段階を経て、その後、個々の現象となって現れる。意志と理念は永遠に不変であり、個体だけが生じ、滅びる。意志が現象する唯一の形式は現在であり、過去や未来は概念の中に存在しているにすぎない。生きんとする意志にとって生ほど確かなものはなく、生の形式は持続する唯一のものである終わりのない現在である。¹⁾

このように歴史を通じて多くの永遠が考えられてきたが、ボルヘスは上述の「永遠の歴史」の中で、永遠とは、過去・現在・未来という三つの時間の同時的存在である、と定義している。つまり、ここにおける永遠とは、時間の連続性、継続性の否定なのである。そしてボルヘスはそうした永遠の典型として二つの永遠、プラトンの永遠とキリスト教的永遠を挙げ、プロティノスの『エンネアデス』第五篇を前者の、アウグスティヌスの『告白第十一巻』を後者の主要文献として引用しながら詳しく説明している。ボルヘスの短編における永遠への接近の方法については既に考察した。²⁾こ

ここではボルヘスの詩に歌われた永遠を中期の詩作品 (1930~1967) を集めた『他者と自身』を中心に追ってみたい。

(1) 「永遠」の所在

最初に、永遠 (eternidad) という言葉そのものを拾ってみる。

Serena,

La eternidad espera en la encrucijada de estrellas (Un patio, FB) ¹⁾

ボルヘスは過ぎ去った午後、中庭、雨水溜めなど、懐かしい日々の懐かしい事物の中に不変の時を見出す。

Africa tiene en la eternidad su destino, donde hay hazañas, ídolos, reinos, arduos bosques y espadas (Dakar, LE)²⁾

永遠とは、武勲、勇者、剣の在りかである。このように、初期の作品に歌われている永遠には明確な定義づけがない。英雄や剣といった晩年までボルヘスを魅了し続けた要素もあるが、ここでは、祖国やブエノスアイレスの風物など、身近な事物に関わっている。

『他者と自身』から、

Sé que en la eternidad perdura y arde lo mucho y lo precioso que he perdido.

Esa fragua, esa luna y esa tarde. (Ewigkeit)³⁾

過ぎ去った愛しいものを、全てを内包する時の総体としての永遠である。

La eternidad está en las cosas

Del tiempo, que son formas presurosas (Al hijo)⁴⁾

連続する時間の中で生起する事象全てに、その源泉である永遠が在る。

『他者と自身』よりも後の作品には多くの例がある。例えば、

Soy aquel otro que miró el desierto y que en su eternidad sigue mirándolo. Soy un espejo, un eco. El epitafio (Yesterdays, LA) ⁵⁾

「私」が生きている時間とは別の、過去のあらゆる出来事を同時に在らしめる大いなる世界がある。「私」は影、木霊、死者である。このよう

に、ボルヘスの詩的創造は、特に『他者と自身』以降、ひとつの明確でコンスタントな意識の上に構築されている。それは二つの相異なる世界が常にある、という意識である。つまり天上と地上、アイデアの世界と形象の世界、継続する時間と永遠と。この二重性はボルヘスの詩的世界を貫いている。前にも書いたが、ボルヘスは永遠の姿の最初の大きな輝きをプラトンの中に見出している。プラトンの二世界説を、この二重性はそのまま写しとったかのようだ。次にプラトニズムの真髓である原型を探してみる。

初期の三つの詩集には原型(arquetipo)という言葉は見当たらない。『他者と自身』には幾つかの例がある。例えば、

¿Qué habrá sentido al contemplar de frente

Los Arquetipos y los Esplendores?

Quizá lloró y dijo: Vanamente

Busqué alimentos en sombras y en errores (Baltazar Gracián)⁶⁾

詩人は死後、天上で原型を目の当たりにし、生前それらの影のみを追って生きてきたことに気づき、嘆く。

『他者と自身』より後の作品には多くの原型が現れる。例えば、

Nada esperabas ver del otro lado

Pero tu sombra acaso ha divisado

Los arquetipos últimos que el griego

soñó y que me explicabas (A mi padre, MH)

ボルヘスは父親の死の場面を歌っている。彼は死の間際に、プラトンの夢見た天上の原型を垣間見るのである。

また、『夜の歴史』(Historia de la noche)の中の「虎に」(Al tigre)においては今日パレルモで見ている眼前の虎も東方の虎もブレイクやユーゴの作品中の虎も、かつて生きていた虎も、これから生きるであろう虎も、全て原型の虎(El tigre arquetipo)に他ならない、と書く。彼らは天上のアイデアの、種の、地上における現れである。このように動物達、虎、コヨーテ(El coyote, OT)、豹(La pantera, RP)、小夜啼鳥(Al ruiseñor, RP)、

野牛 (El bosonte, RP)等は超時間的生の代名詞である。ショーペンハウエルの猫の譬えが思い出される。また、動物達の時も死も知らない瞬間を生きる生は「永遠の今」を生きる姿として、人間がいくら望んでも到達できない在り方であるが故に、ボルヘスを強くとらえる。⁸⁾

こうして、ボルヘスは絶えず永遠にたち帰り、その詩は原型、もしくはそれを示唆するものに満ちている。プラトンの二世界説的世界感は常にボルヘスと共にある。何故か。

ボルヘスの作品、特に詩作品には、初期のものから晩年に至るまで、二つの思いが絶え間なく流れている。一つは時の流れの意識から解放されたいという願い。もう一つは世界の冗漫さ、多様性を嫌い、⁹⁾不変のシステムによって統率された、整然とした宇宙観を常に抱いていたいという思いである。

第一の願いはボルヘスにはお馴染みのテーマである。彼は刻々自分の上ののしかかってくる過去の時間の重みを感じつつ生きる。過ぎ去ったものは何処にあるのか。彼らは今も生き続けているのではないか。ボルヘスは不眠の夜、闇に蠢く無数の死者を現し身のように間近に見たのかもしれない。あるいは、それと知らず、無心に眠る人々の上に死を見たのかもしれない。時間と空間に生きる生身の自身を意識しながら、ボルヘスの耳は絶えず過去から呼び掛けてくるひとつの声を聞いている。それは、北欧の神々の世から、ギリシアの哲人達の時代から、あるいはイングランド建国の英雄達の時代から、今に至り、これからも決して何も変わらぬ、いつも同じである、常に一つである、という呼び掛けである。

第二の願いは、ボルヘスがコスモスの縮図として創造したアレフや、モデルとして用いた図書館、迷宮によく現れている。つまり、内部は混沌であるが、全体としては統一された形態に全てが封じ込められている、そのようなビジョンである。

ボルヘスには常に宇宙の総体の意識がある。宇宙全体のビジョンを手の内におきたい、把握しておきたいという願いは真摯なものだ。絶え間な

く無限に広がっていくもの、増殖していくものがボルヘスを恐れさせる。例えば「不眠」(El insomnio, OM)の中で語られている、どこまでも拡大し延びていく街のイメージは悪夢の中の迷路のイメージと重ね合わせることができる。暗闇の中でいつ果てるともされない分岐を繰り返す無数の街路の、せわしなく終わらない在り方は、ボルヘスを脅えさせ、苦しめたに相違ない。この原因と結果のめくるめく連鎖、多様性、差異性、同時性はボルヘスを圧倒する。その、一個人では整理しきれない、消化しきれない膨大さは、ほとんど彼を狂わせる。絶えず生まれ、繰り返され、互いに絡み合い、感情によって複雑にされ増殖されていく地上の事象は、彼を窒息させる程悩ませただろう。それ故、「闇を讃えて」(Elogio de la sombra)の中でボルヘスは盲目は苦悩ではない、むしろ安らぎであると歌っている。それはむしろ永遠に似ていると。盲目は回帰である。以前、ブエノス・アイレスはパンパに向かって限り無く延びていったが、今再び各々の小さな通りに帰ってきている。同様に、ゆっくりと訪れる暗闇により、あらゆる経験が私の中心に戻ってきてつつある。やがて、そこで、私の本当の顔に行き着くであろう、と。本当の顔とは、たった一つの運命の顔である。それは「たった一つ」であるために悟りと安堵を与えてくれる。その瞬間に人は気づくはずだ。自分の人生が何であったか。様々な喜びと悲しみ、繰り返しと無駄に満ちた毎日、迷いと困難の遠い道のりの全てが、その唯一で不可避の運命に還元される。存在の多様性と変転を説明し、その根底に統一を見出すことはギリシアの哲学者達の根本的な課題であった。クセノファネスに始まる全ては一であるという命題をボルヘスは短編の中で何度も応用しているし、詩にも書いている。ボルヘスの詩を貫いている二重の構造を可能にするプラトンの観念論的世界観はこれらの二つの願いを叶えてくれる。恐れる必要はない。いくら時が流れようともそれは結局のところ回帰である。どんなに傷つけられようとも、見せかけにすぎない。それは我々の本質を根本的に損なうことはない。いかに人が、物が、生じ、消え、代を変え、変転しようとも問題ではない。全てはとどのつまり、同じであ

る。

次に、ボルヘスの定義通りの永遠、つまり過去・現在・未来の三つの時間が同時に在る場所を探してみる。

； ¿Dónde estarán? pregunta la elegía

De quienes ya no son, como si hubiera

Una región en que el Ayer pudiera

Ser el Hoy, el Aún y el Todavía.

(El tango, OM)¹⁰⁾

憎悪も損得勘定も愛も無く、ただ勇気を示すためにのみ闘って死んでいった場末の男達。彼らは無限の闇に消え去ってはならない。彼らが生き続ける場所があるはずである。それは、昨日も今日も明日もひとつであるようなそんな領域である。

Lejos del tiempo, que es mudanza

Edwards, eterno ya, sueña y avanza

a la sombra de árboles de oro,

Hoy es mañana y es ayer.

(Jonathan Edwards, OM)¹¹⁾

絶え間無く移りゆく時間から自由になり、もはや永遠の存在となったエドワーズは、今日が明日であり、また昨日でもある世界の住人である。

Seré mañana el misterioso, el muerto, El morador de un mágico y desierto

Orbe sin antes ni después ni cuándo.

(Los enigmas, OM)¹²⁾

これは厳密な三つの時間の一致ではないが時間の継続性が否定されている。この前も後も「何時」ということもない世界とは、もちろん死者の世界である。

Yo, que soy el Es, el Fue y el Será

vuelvo a condescender al lenguaje,

que es tiempo sucesivo y emblema.

(Juan, I 14, ES)¹³⁾

ここでの「私」は人間の身体を借りて地上に現れた神、イエスである。イエスはかつて在ったものであり、今在るものであり、これから在るものである。同時にそれら一切のものである。それは、連続する時間であり象徴である言葉と対照をなしている。

これらの例から、過去・現在・未来の三つの時間が同時に存在するのは、神性においてであり、死者の世界であることがわかる。

さらにもうひとつ、ボルヘスの永遠と深く関わるものとして鏡を挙げたい。ボルヘスは鏡について次のように言っている。「鏡は重複の概念、もう一人の自分という考えにつながる。これは全く別の概念、時間の概念に関係づけて考えなくてはならない。なぜなら、時間とは、すなわち、継続する〔私〕及びその他全ての変化するもののコンセプトそのものなのだから。」¹⁴⁾

これを読むと、鏡は「もう一人の自分」(el doble, el otro yo) と「時間」という詩人にとって宿命的な二つのテーマと分かち難く結びついていることがわかる。ボルヘスの鏡の意味をより明らかにするために「彼はかのギリシア人と同様知っていた／地上の時間は永遠の鏡であることを」(Emanuel Swedenborg, OM) というシンボリックな一文を挙げたい。連続する時間は永遠 (el eterno) を映す鏡なのである。『ボルヘス、オラル』の中の時間についての講演においては「鏡」を「似姿」に置き換え、プラトンの『ティマイオス』に倣って、「時間とは永遠の似姿なのである。」と述べている。¹⁵⁾

このことは他の詩の中にも何度か歌い込まれている。例えば、「時間は我々から途方もない恩恵を奪う／あまりに秘めやかで、不眠の後の夢で、黄金に染められた浅い眠りの中でだけ感知しうる恩恵を／その夢は、昼の間は鏡の中で変形された、名前も時間も無い世界の、不完全な反映なのかもしれない」。(El sueño, OM) 名も無い、時間も無い世界というのは天上の世界。地上においては、日々の鏡の中に変形された姿を見せる。

あるいは、「すでに全てはある／夜明けと夕暮れの間／君の顔が鏡に残

してき／また今も残し続けている幾千の映像も／そして全ては／かの千変万化の記憶の鏡、宇宙の一部なのだ」(Everness, OM) というように、鏡に映ることによって個々の物は永遠の仲間入りをする。しかしそれは同時に、天上の原型が鏡を通して様々な形で地上に現れていることの証明でもある。「地上の猫／鏡の猫も熱い血の猫も／永遠の原型が時間に与えた幻影である」(Beppo, LC) や「鏡の中で他者が待ちうけている／全ては初めて起こる／女を抱く全ての男はアダム、女はイブ」(La dicha, LC) 等の詩も同じことを伝えている。鏡の中では個々の領域を脱し、永遠の相の下で物事が生じうる。鏡とは、原型が地上に現出する手段であり、これを通して人は原型の世界を識る。

ボルヘスにおける鏡と永遠の関係を探る上で決定的と思われるのは次の詩句である。

En su larga visión como en un mágico
Cristal que a un tiempo encierra las tres
caras del tiempo que es después, antes, ahora,
Sarmiento el soñador sigue soñándonos.

(Sarmiento, OM) ¹⁵⁾

ここでは、鏡の中に三つの時間の一致、永遠がある。鏡は正に、天上と地上が触れ合う不思議な領域である。まず、人は鏡の前で己のアイデンティティーに疑いを抱く。そこで原型の世界を垣間見る。鏡を通して原型はその姿を地上に現し、そこには、三つの時間、過去・現在・未来の一致、すなわち永遠が存在する。

(2) 地上において天上を生きる方法

前章で繰り返し言及した天上と地上の二重構造は特に『他者と自身』の中の幾つかの詩にはっきりとした形で現れる。「オデュッセウス、第二十三書」では、二十年に及ぶ苦難の漂白を終え、イタカに帰り着いて復讐を果たしたオデュッセウスが語られている。その結びの部分。

pero, ¿ dónde está aquel hombre
 Que en los días y noches del destierro
 Estaba por el mundo como un perro
 Y decía que Nadie era su nombre¹⁾

王は国に戻り、再び王妃と王にふさわしい生活を手にするが、野犬のように名も無くさまよって歩いた日々を懐かしむ。それは、彼の王国とは全く別の世界だった。そこで、彼は何者でもなかった。ホメーロスの『オデュッセイア』では主人公はいつも故郷を偲び、帰りたい一心で生きているから、この、名も無い日々を懐かしんでいるのはオデュッセウスではなくボルヘス自身ということになる。

また、「アレキサンダー・セルカーク」という詩でも別世界を経験した後
 に人間の世界に帰って来た男が語られている。

Cinco años padecí mirando *eternas*
Cosas de soledad y de infinito
 Dios me ha devuelto al mundo de los
 hombres
 A espejos, puertas, números y nombres,
 Y ya no soy aquél que *eternamente*
 Miraba el mar y su profunda estepa
 ¿ Y cómo haré para que ese otro sepa
 Que estoy aquí, salvado, entre mi gente?²⁾

セルカークは五年間過ごした無人島から救い出され帰郷するが、彼もまた人間の世界から、名前の無い永遠に住む世界を思い、恋しがらる。ここには、一人の人間の分裂がある。帰郷し人間界に住む男と、無人島で「永遠の相の下」で海を見ているもうひとりの男と。オデュッセウスもセルカークも漂流の年月の間、名前を持たない世界、時間の流れの無い世界、つまり、アイデアの、天上の世界を生きた。永遠から流れ出した時間が源である永遠への回帰を望むように、彼らも天上を思い、心を寄せ続ける。彼らは旅

の間、以前持っていた全てを失い、ただの裸の人間として生きた。この、ただの名前の無い人間ということが大切なのである。

ボルヘスは何より我執を厭う。その我執から生まれる感情も嫌悪する。詩の中でさえも個人的な感情を歌ったものは少ない。ボルヘスが「詩の個人性を否定し」、「詩の価値をひとりの人間に起こったことのみでなくあらゆる人間が自分のこととして認めることを述べることにおく」³⁾という信条に則って詩作したことのみをその原因と考えるのは難しい。人が何かを感じる時、それは己のために感じるのである。ボルヘスはハイデッカーやヤスパースの哲学を、「自我にまつわる幻想を煽りたてているに過ぎない」として切り捨てる。個体的実存に重きを置かないボルヘスには、苦悩さえも取るに足らない。

また、ボルヘスは『異端審問』の中の「歴史を通じてこだまする名前」というエッセイで、シェイクスピアの喜劇に登場する一人物、策略を用いて隊長にまで出世するが、その策略がばれて官位を剥奪される人物の言葉、「もう隊長はやめた。が、食ったり飲んだり眠ったりは隊長なみにできるだろう。ありのままの自分であれば生きてゆくことはできるだろう。」を例に引いている。さらに同ジエッセイの中で、晩年、死を目前に、耳が聞こえなくなり、気が狂ったスウィフトが、「私は、あらんとしてあるものである、私はあらんとしてあるものである。」と繰り返し呟いていた、という逸話にふれている。これらの言葉を、野良犬のように地獄の底を這い回っていたオデュッセウスの姿と並べてみると、ボルヘス独特の美学が見えてくる。

『創造者』に含まれている「ボルヘスとわたし」の中で、ボルヘスは二人の自分がいると書く。一人は外界で他人の目に晒され、周囲と何らかの関係を結び、自然、彼らと互いに何らかの感情を抱きあうボルヘスと呼ばれる存在。もう一人は、外界と関わりのない場所でひたすら我を忘れ、他者から見られる客体としての己を無くして、ただ真に愛するものの中に埋没していく名の無い自分である。ここでは天上と地上が現世で二重にある。

オデュッセウスの、セルカークの分裂がボルヘスにも起こっている。

さらに、その最後に、「私は一切を失う。そして、その一切が忘却のものに、つまり、もう一人の男のものになるのだ。」と書いている。してみると、忘却とは永遠そのものといってもいい。地上での一切はボルヘスに残して、「わたし」は無に帰し、天上と同化する。「わたし」は生きながら名前を失った漂泊のオデュッセウスである。

それでは、肉体は「わたし」とボルヘスのどちらのものなのか。本来は肉体は名前を持った地上の人間のもの、つまりボルヘスのものである。だが、現世に生きる限り名前を失っても肉体から逃れることはできない。しかし、それは否定的な意味ではない。むしろこの、名前を失いながら肉体を背負っていくことに、ボルヘス文学の他の場所では見られなかった実存的な美がある。「ボルヘスとわたし」の「わたし」、肉体と魂（意志）とが本当にひとつであるような、他に何も所有していない孤立無援の一体化の極致、存在の地平ぎりぎりの生、それがボルヘスの愛したものである。こうして永遠の意志の発現としてのうたかたの生を強烈に意識することで、生きながらにして天上を経験する。

ところで、このような最低の在り方は勇者を真の英雄にする。オデュッセウスは長い苦難と屈辱の漂流の後、やっとイタカに帰り着くが、館には、彼の奥方と財産を狙う求婚者達がたむろしている。オデュッセウスは乞食に変装して彼らの目をくらます。求婚者達はさんざん彼を罵り、嘲笑する。オデュッセウスはそれに耐え、最後に名乗りをあげ、彼らを皆殺しにして復讐を果たす。

またボルヘスは『汚辱の世界史』で赤穂浪士のエピソードについて書いている。内蔵助は仇討ちの計画をカムフラージュするために放蕩に身を委ねる。酔って、通りでひっくりかえっている内蔵助はあらゆる屈辱を黙って受け入れ、墮落の底の底まで落ち込みながら最後には見事にかたきを討つ。

「推測の詩」(El poema conjetural, OM) でボルヘスは母方の遠縁にあ

たるフランシス・デ・ラプラタ博士の死を前にした行進の場面を歌っている。それは、血と泥にまみれた野垂れ死にへの行進以外の何ものでもない。連邦の独立を宣言した偉大な政治家の最期は、猟師の銃弾に傷つき、森の奥深く、孤高の死を待つ虎のそれではなく、何万匹の大群にまみれて川を渡りながら途中で溺れて果てる野鼠のそれである。だが、博士は、その運命を甘んじて受け入れる。小さい頃から自分の生が織りなしてきた迷路の核心がやっとみつかった、これで安んじて眠れる、私はそれを望んでいる、と。この、最期の、救いようのない惨めさこそ大切なのである。こうした、地に這いつくばうような屈辱の在り方は、英雄の飛翔の条件である。⁴⁾

しかし、この飛翔とは、どのような飛翔か。すでに書いたが、ボルヘスが愛するのは、野犬のような放浪のオデュッセウスであって栄光の王者ではない。スウィフトの晩年の悲惨さは極限であり、美のかけらも見当たらない。彼らは天上に接するが、それは高みへ昇ることではない。

ボルヘスは『仏教とは何か』の中で、涅槃 (Nirvana) について語っている。涅槃に至るためには全ての行為は一時的で幻であると感知することであるとし、この感覚にとっては成功も失敗も、生も死も、肉体の快樂も痛みも同一である、と書く。涅槃とはアイデンティティの喪失であり、全てが一であると悟ることである。しかもそれは神性との同化ではない。己を無とするまでの差異の喪失なのである。序の章で人間が考えてきた様々な永遠を見てきたが、絶対者、完全なものへの志向は、現象界の迷路を手探りで生きる人間にとっては宿命のようだ。だが、ボルヘスの迷妄からの脱出に関する思考はむしろ仏教的救済に近い。それは、最低の状態にまで降りていくことで、時間の無い、大いなる海のような涅槃に入ることである。これがボルヘスが考える飛翔であり、地上に在りながら天上を生きることなのである。⁵⁾

ボルヘスは若い頃からこうした地上における天上の生を生きようとしていた。例えば、「平和を誇る」(Jactancia de quietud, LE) では野心に燃え、欲望のままに成功を追って奔走する人々を平静の高みから静かに眺め

る達観した心境が歌われる。

El tiempo está viviéndome.⁶⁾

私が時間を生きているのではなく、時間、意志が私という形象を借りて生きているのである。

また、「墓碑銘」(Inscripción en cualquier sepulcro, FB)では、墓碑には名前も祖国も思想も書き記すべきではない、と歌っている。死者の本質は別の場所に生き続けるのだ。誰のものでもない、不変の意志が無数の個体を媒体として地上に現れ続ける。個人の荣誉や思想など、取るに足りない。

真の英雄は突出した存在でなくてはならない。だが、真の解脱は、その特殊性を完全に捨て去るところにある。サルミエント (Sarmiento, OM) はもはやエコーやシンボルではない。根源的な人間として扱われ、その意味で永遠なる人 (el Eterno) と同じである。また、彼は歴史の証人であり、過去・現在・未来は同時に全て彼の視界の中にある。そうした意味でも、永遠なる人である。もはや彼は神と同じ高みに達し、人間の世界を夢み、我々を現出せしめている。しかし、そのためには彼は魔法の時を越えたビジョンの中で抽象化されなくてはならない (*Abstraído en su larga visión*)。また、若いボルヘスは見知らぬ街を散策しながら「我々の全ての歩みはゴルゴダの丘を踏んでいるのだ」と感じ「バラ色の店のある街」では、「どこにでもあるこの街」で「自らの貧しさを告白」し、「私にとって親しいのはブエノス・アイレスの灯だけだ」と故郷の街への真摯な思いを吐露する。ボルヘスが「永遠の歴史」の中で語っている個人的な永遠と出会うのもブエノスアイレスの「疲労のために単純化され」、非現実的に見えた名も無いような界限なのである。具体的なものは愛しにくい。抽象化されたものの中には安らぎがあり、永遠が宿る。全く何も所有していない、存在の地平ぎりぎりの生において、ボルヘスは瞬間的なめくるめく歓喜に出会う。

(3) 全き死と永遠

ショーペンハウエルにおいては、死こそが本源への復帰、すなわち、意志の世界へ還ることであるという。¹⁾「意志の自主的な否定・放棄」と共に、「あらゆる現象も」、「目標も休息も無いあの不断の雑踏混乱も」、「段階的に連なる形式も多様性も」、「現象の一形式たる時間・空間も」、「その根本形式たる主観・客観も断滅する」という。ここに、第一章で見たボルヘスの二つの思い、時間からの解放、世界の多様性の滅却が叶えられる。前章で考察したように、ボルヘスは名前を持たない、何も所有しない生を生きることで生きながら天上に入ることを願った。だが、第一章で見たように、完全な三つの時間の一致としての永遠は死の世界でのみ可能なのである。

『他者と自身』以降、ボルヘスは非常に度々自らの死に言い及んでいる。「サクソンの詩人に」(A un poeta sajón, OM) では、「神々と時間の総和に請う／私の人生が忘却に値するやと／ユリシーズのように、私の名前が誰のものでもなくなるやと」と歌う。またしてもオデュッセウスである。そしてここでも、名前をなくしたいとボルヘスは願う。時間の総和 (La suma del tiempo) とは永遠のことであり、死の世界でもある。オデュッセウスは生きながら冥府をさまよったが、英雄ならぬ我々が何者でもなくなるためには死ななくてはならない。そしてボルヘスはそれを望んでいるのである。

また、第一章でも引用した「謎」(Los enigmas, OM) では、「明日は私も死者に／神秘で索漠とした／前も後も、時間も無い国」(Orbe sin antes ni después ni cuándo) の住人になるだろう」「(死の) 透明な忘却を飲み干したい／私は永久に在りたい／だが、いっそ、何もなかった方がよかったのだ」と死と自らの存在についての思いを語る。この詩においても、死の世界は永遠の世界である。ここでは、「サクソンの詩人に」よりも感情は複雑である。ショーペンハウエルが著書の中で死にゆく者に対して言って

いる言葉が思い出される。「お前は何かであることをやめるのだが、むしろそのような物にならない方がよかったのだ。」²⁾

「目覚め」(El despertar, OM) では、「ああ、あのもうひとつの目覚め、死が、／連れて行ってくれたらいい／私の名前や存在の記憶が全く無い時間の中へと」と、悲痛な思いはより切実である。死は必ず全きものでなくてはならない。名前も「私」自身であったところのものも、全て無に帰さなくてはならない。ボルヘスは「ボルヘスであったところのもの」からどうしても自由になりたいと願う。「もし意志に記憶と個性が残るならば意志は真に得るところもなく、無限に同じ行動と苦悩とを続けることに耐えないであろう。意志はそれを放棄する。これが忘却の川である。」³⁾とショーペンハウエルはまた書いている。忘却とは何か。

ボルヘスは「永久」(Everness, OM) で、「たったひとつだけ、無いものがある。それは忘却」と書く。同様に「永遠」(Ewigkeit OM) でも「私は知っている、無いものがひとつあることを。それは忘却」と歌う。ソクラテスの想起説が思い起こされる。忘却というものは無い。全てはすでに宇宙の記憶に書き込まれている。個体に意志が、アイデアが発現することにより、地上において新たに思い起こされる。では、先にふれたショーペンハウエルの忘却とは何であろう。それは、個人の記憶の、日常の忘却である。その意味では忘却に結びつくのは「ボルヘス」であって「わたし」ではない。「わたし」は忘却の外にある。「死ぬことは個性の偏狭から解放される瞬間である。」⁴⁾ボルヘスが望むのはこれである。死によって「ボルヘス」に完全に別れを告げ、「わたし」をして天上の生を生かしめる。

しかし、この天上を甘美なイメージで想像することはどうしてもできない。ショーペンハウエルは生きんとする意志の否定によって諦念へと導かれ解脱に達することができるとし、意志の否定への二つの道を挙げている。第一の道は全世界の苦悩を認識し、この苦悩を自発的にわがものとするのであり、第二の道は度外れた苦痛を自分で経験することを通じて、意志の否定に達する、のである。ボルヘスはどうか。

「悔恨」(El remordimiento, MH) の中でボルヘスは珍しく正直に心情を告白している。「私は人間の犯しうる罪のなかで最悪の罪を犯してしまった／私は幸せではなかった。氷のような忘却が／情け容赦なく私を奪い去り消し去ってくれたらいい」と。

また、ボルヘスは同じ詩の中で「私は勇敢ではなかった」と嘆く。勇氣はボルヘスにとって至上の価値である。勇者はもはや地上の人間ではない。天上の住人で悠々時を越える。彼らは個人ではなく、タイプである。そして真の勇者は、アキレスのように若くして戦場で死ななくてはならない。

短編「南部」を思い出してみる。病院のベッドに自由のきかない身体を横たえ、屈辱的な入院生活に耐える自分が現実。緩やかな夕闇のように彼の全存在を優しく抱いてくれるパンパでの、ナイフを手にした決闘による死は超日常であり天上の世界への飛翔である。実人生でのボルヘスは若くして闘いに死ぬこともできず、老いて盲い、身のまわりの事にも他人の手を借りねばならず、自分の生活は両親が望んでいたものとは違い、不幸だったと思っているのだ。ボルヘスの個の否定は単に観念ではなく、ボルヘスという個人の自己の否定である。前章で、肉体と意志の地平ぎりぎりの融合の中に実存的な美を見出したが、そこには生への強い意欲は無い。むしろそれは、限り無く死に近い在り方である。⁶⁾

ショーペンハウエルの語りの明晰さ、力強さはボルヘスの変わらぬ賞賛的であったが、哲学者の言う「盲目的な生の意志」のエネルギーはボルヘスの作品には感じられない。むしろ、反復、反映、影といった消極的なイメージが大半である。「意志は死の眠りによって新鮮になり別の知性が与えられ、新しい生物となって再び登場する」⁷⁾ははずであるが、「新しい生」に関しては、どう見てもボルヘスは積極的ではない。

また、先にも例を引いたエッセイ「歴史を通してこだまする名前」で、ボルヘスはショーペンハウエルが「自分は不幸な人間だとしばしば思ったことがある。しかし、不幸な境遇など、せいぜい自分がまとい、脱ぎ捨ててきた衣服でしかない。では私はいったい何者なのだろう。私は『意志と

表象としての世界』の著者なのだ。」を引用し、ショーペンハウエルは次のように悟ったのだと語る。「すなわち、思想家であることは、病人、あるいは蔑まれた人間であるというのと同じく錯覚でしかない、自分は本質的に別のものだ、つまり意志である」と。しかし、これはボルヘス自身の考え方にショーペンハウエルを引き寄せた解釈であり、ショーペンハウエルの言葉にはもっと強烈な誇りがある。あくが強い分だけ、哲学者には、何者かであることへの執着がある。ボルヘスにはこれが無い。

前の章で涅槃についてふれたが、ショーペンハウエルもその著書の死について述べた箇所では涅槃に言及している。ショーペンハウエルは、自ら進んで生きる意志を放棄するものこそ、見せ掛けではなく真実に死ぬものであるとし、その人は人格の存続を必要としないし、望みもしない、と言う。彼は天上から見れば無であるところの我々の生存を捨て、代わりに、我々の目から見れば無であるところのものを与えられる。これが仏教でいう涅槃である、と書いている。そこには上昇がない。涅槃とは、流転から脱した文字どおりの全き消滅であり、いかなる上位者も必要としない。ボルヘスこそは、この真実の死の体現を望んだものである。⁸⁾

また、ボルヘスはバーナード・ショウの「私は何者でもなければ誰でもない。」という考え方に賛同し、ショーの戯曲の登場人物を優れているとしている。しかし、ショーの言うところの「生の力」はボルヘスの作中人物を鼓舞しない。『人と超人』のアンナのような女性はボルヘスの短編には登場しない。愛は不毛か、死によって引き裂かれる運命にある。例えば、「侵入者」(La intrusa)では、兄と弟の両方に愛された女は兄弟の男どうしの絆を守るために殺されてしまう。「エンマ・ツツ」のヒロインは父親のかたきを討つために嫌悪以外の何の感情も抱いていない男に身を任せる。そしてブリュンヒルデのエコーたるウルリカは暗い宿命を予感させる。こうした女性達は決して超人を産みはしないだろう。

ボルヘスはニーチェを愛せず、古代ギリシアの時代から繰り返し考えられてきた命題を「永劫回帰説」としてあたかも全くオリジナルな発見でも

あるかのように吹聴していると批判する。ボルヘスの不快は正にニーチェが個の不死性を主張しているからであり、哲学者の、生のまったき充実と肉体への愛の熱烈な希求を共有できなかった。

ここで、意志の否定に至るショーペンハウエルの二つの道にもう一度帰ってみる。第一の道、全世界の苦悩の自発的な受容、いわゆる同苦については、これは大変にむづかしい道である。もしショーペンハウエルがたった一人でも隣人の苦悩、苦痛を真に我がものとしてできる人格であったならば、彼の、意志と表象としての世界観は生まれえなかったであろう。ショーペンハウエルの哲学を愛するボルヘスにしても同様であろう。第二の道は第一の道よりは受け入れやすい。ボルヘスの苦悩が「度外れな」ものであったか否かはわからないが、上に述べた、自らの人生に対する悔恨の情、自殺への誘惑等を考えると、確かに詩人にとって、これは生きる意志の否定へと繋がる道ではあった。

ボルヘスは不幸で生に対して否定的であった。彼は小さい頃から他の人間になりたくて仕方がなかったと述べている。鏡は恐怖の対象であると同時に、見果てぬ夢を映し出す幻の場所でもあったに違いない。

前にもふれたように、ボルヘスは繰り返し忘却を願い、復讐の唯一の方法は忘却であるとも言っている。「記憶の人、フネス」の不幸なフネスはボルヘス自身であった。ボルヘスの強烈な意識は何よりもボルヘス自身の個を強くその記憶に刻み続けた。⁹⁾愛を得られず勇気ある死を迎えられなかった過去は決して消えず、そこに生き続けボルヘスを苛み続けた。忘却を望むのは、それがボルヘスにとつ大変な困難であったからである。全き死とは、完全なる忘却とは、不幸な己の生への彼らしい復讐の形だったように思う。

個を拒みながらも、自意識の強いボルヘスは不幸で勇敢でなかった自分が容認できない。ボルヘスの名も肉体も魂も全て滅しなくてはならない。そこには輪廻も再生もない。それは、意のままにならない個体からの解放であるとともに、彼を苦しめてきた時間の総和の重さからの解放であり、

何よりも眠りを奪うことで夜の間も休むことなく彼を苛み、夢の中でさえも彼を放さなかった粘り強く執拗な意識からの解放なのである。

結び

新時間否認論で空間を否定し、自我を否定し、連続する時間を否定した後で、ボルヘスは最後に「不幸なことに世界は現実で、不幸はことに私はボルヘスである」と書いている。長い創造活動を通じて個と実在の否定を繰り返してきたにもかかわらず、「不幸なことに」自分の理論を信じていない。

このエッセイが書かれたのが1946年である。二十数年後、1979年に行った不死性に関する講演の中で、¹⁾ボルヘスは新たに個の価値を否定し、「もしこの世界が本当によくなれば我々はその救済において永遠の存在になるだろう」と述べている。自分でも信じられない理論と自己否定を抱き続けた長い年月の後のこの言葉は虚しく響く。たとえ世界の永久平和が約束されても、個人の不幸はそれこそ永遠にあがなわれないだろう。そのような永遠にどんな意味があるだろう。形而上学は常に普遍を求める。普遍に憧れながら脆い個をすくいあげていくのが文学であるように、私は思う。

アリシア・フラードによると、ボルヘスにはおい、味、音といった感覚的な喜びを軽視し、ほとんど興味をしめさなかったという。観念が全てであったボルヘスには、肉体は着心地の悪い、不似合いなコートのようなものだったかもしれない。思想とか主義とかいうものは結局願望であり、儚い慰めであろう。ともかくボルヘスは長い迷妄の後、ようやく気にいらぬコートを脱ぎ捨て、彼の望む永遠を手に入れた。

注

本文中の略号は次の通りである。

FB: Fervor de Buenos Aires 『ブエノス・アイレスの熱狂』

LE: Luna de enfrente 『正面の月』

- OM: El otro, el mismo 『他者と自身』
 ES: Elogio de la sombra 『闇を讃えて』
 OT: El oro de los tigres 『群虎黄金』
 RP: La rosa profunda 『深遠なる薔薇』
 MH: La moneda de hierro 『鉄の貨幣』
 HN: Historia de la noche 『夜の歴史』
 LC: La cifra 『暗号』

序

- 1) ショーペンハウエルは『ウパニシャッド』を生涯枕頭の書としたというが、ウェーダーンタ哲学の代表的な存在であるシャンカラの世界観はショーペンハウエルのそれに通じている。無常なものの中であって恒常的で唯一しかも永遠に変化しないもの、消滅する身体に宿る不滅のもの、それが永遠に存在する認識であり「永遠の現在」である。この認識・意識のみが真理であり、我々の肉体は無知の産物である。我々を取り巻く世界はマヤーという名の幻影にすぎない。
- 2) La aproximación a la eternidad en la literatura de Borges 『日本福祉大学研究紀要』第78号(1989年)

第一章

- 1) Borges, J. L.; Obra Poética Alianza Editorial, S. A. 1987, P36
- 2) Ibid. p86
- 3) Ibid. p259
- 4) Ibid. p280
- 5) Borges, J. L.; La cifra Alianza Editorial, S. A. 1981, P51
- 6) Borges, J. L.; Obra Poética Alianza Editorial, S. A. 1987, P202
- 7) Ibid. p490
- 8) 「もし今庭で遊んでいる猫が、三百年前そこで同じように飛んだり戯れたりしていた猫と同じものだと私が真面目に断言したら、確かに間違いだと思われるだろう。しかし、今日の猫は三百年前の猫と全く根本的に違ったものだと信じるのも、確かに一層間違いじみたことである。」ショーペンハウエル『意志と表象としての世界』続編第41章

シルビア・オカンボが伝えるエピソードを上記の一節と並べてみると興味深い。ボルヘスがマル・デ・ラ・プラタのシルビアの家を訪れた時彼女の犬が迷子になった。血眼になって探している彼女にボルヘスは真面目で、本当に自分の犬を見分けられると思うのか、(他の犬と区別できるか)と尋ねた

という。また、同じくオカンボによると、ボルヘスは動物に一種の神性を感じ、畏怖していたという。

- 9) Guillermo Sucre も *Borges, el poeta* (Monte Avila Editores, 1967) において現実の世界の現象の過剰がボルヘスを苦しめている、と述べている。このテーマを鏡と関連させ次のように書いている。Lo que alarma ciertamente a Borges es un mundo reducido al caos por su copiosidad.
- 10) Borges, J. L.; *Obra Poética* Alianza Editorial, S. A. 1987, p209
- 11) Ibid. p236
- 12) Ibid. p242
- 13) Ibid. p319
- 14) *Borges en diálogo*, Grijalbo S.A. 1985
- 15) ショーペンハウエルもまた継続する時間が支配するこの世界を鏡にたとえる。例えば、「認識は世界をありのままに映す明るい鏡」正編第二十七節。「(個々の人間は) 客観を映し出す透明な鏡」正編第三十四節。「(現象界は) 意志を映す鏡」正編第五十四節。「このような意志を映し出す鏡にほかならないのが世界である」正編第六十三節、等々。
- 16) Borges, J. L.; *Obra Poética* Alianza Editorial, S. A. 1987, P222

第二章

- 1) Borges, J. L.; *Obra Poética* Alianza Editorial, S. A. 1987, P219
ホメーロスの『オデュッセイア』第九書。オデュッセウスは航海中暴風により漂流。途中で単目巨人キクロープスに会い、戦う。名前をきかれ、自分は誰でもない (outis, no one) と答える。
- 2) Ibid. p218
- 3) *Borges y la literatura*, Universidad de Murcia, 1989, p196 Adolfo Ruiz Díaz の [Elementos musulmanos en la obra de Borges] からの引用。El valor poético consiste (. . .) en decir, no ya lo que se le pudo ocurrir a un solo hombre, sino lo que todos los hombres reconocen como suyo.
- 4) このことはボルヘスの屈折した自虐的傾向と関わりがあるように思われる。E. D. Mónegal の伝記によるとボルヘスは性的なこと、自分の肉体を極度に嫌悪していたという。肉体を傷つけること、打ちひしぐこと、最終的には無くすることで肉体と感覚からの解放を望んだのではないか。
- 5) Guillermo Sucre は著書 (第二章注9参照) の中でボルヘスが自らを貧しくすることによって永遠に至り、絶対的なもの (lo absoluto) に近付こうとした、と書いている。この絶対的なものこそボルヘスの全作品の目的である、とも書いている。
- 6) Borges, J. L.; *Obra Poética* Alianza Editorial, S. A. 1987, P80

第三章

- 1) 兵頭高夫『ショーペンハウエル論』行路社 1985, p146
- 2) ショーペンハウエル 『意志と表象としての世界』, 続編第四十一節
- 3) Ibid.
- 4) Ibid.
- 5) E. R. Mónegal は伝記 (Una biografía literaria, Fondo de Cultura Económica S. A. 1987)の中で、「南部」と先に引用した「推測の詩」には当時の政治状況が大きく影を落としていてと書いている。ペロン統治下で不遇をかこっているボルヘスがダールマンのような、あるいはラプラタ博士のような死を望んでいた、その表れであるという。
- 6) Julio Woscoboinik は著書 (El secreto de Borges, Editorial Trieb, 1988)においてボルヘスの自己否定と関連づけ、Bionの説 (El lenguaje y el esquizofrenico, Psicoanálisis y lenguaje, Editorial Kapeluz, 1981)を引用している。「自己の分裂のメカニズムは(・・・)できる限り多くの人間になりたい、できるだけ長い時間、つまり永遠の間にあらゆることを手に入れたい、という意図を表現しようという試みの結果である。」ボルヘスは「アレフでは全てを一点、一言に集約しようとし、「八岐の園」では(プロットとして)多くの可能性の中から一つを選ぶのではなく全ての可能性を同時に採用する、そういう小説を登場させている。Woscoboinikはこうした例をBionの説にあてはめようとしている。そして「この一見冷たく知的で禁欲的な詩人はドラマチックで恐ろしい情熱、欲求を隠していた」とする。確かにボルヘスの自己否定の裏には他の人生を望む思いがあった。だが、それほど激しい情熱や生への欲求があったなら、かくも執拗に死を願う詩を作り続けたであらうか。
- 7) ショーペンハウエル『意志と表象としての世界』続編第四十一節
- 8) しかし、兵頭高夫の『ショーペンハウエル論』には、ショーペンハウエルの涅槃の世界はすでに実在であり超越的なものが感じられ、仏教における涅槃の非有、非無の、いわゆる「空」とはすでに異なると書かれている。
- 9) ボルヘスの強い恥の感覚、自己主張への嫌悪、忘却の願望は全て、彼の病的なまでに強烈な意識の証明であると思われる。

結び

- 1) 『ボルヘス、オラル』白馬書房, 1987
- 2) Julio Woscoboinik のEl secreto de Borges(第三章注6参照)の愛について書かれた箇所 (Endimiión en Buenos Aires) からの引用。

引用・参考文献

1. Alifano, Roberto; *Ultimas Conversaciones con Borges*, Torres Aguero Editor Buenos Aires, 1989
2. Borges, Jorge Luis; *La cifra*, Alianza Editorial Madrid, 1981
3. Borges, Jorge Luis; *Obra Poética*, Emecé Buenos Aires, 1977
4. Borges, Jorge Luis; *Obras Completas* Emecé Editores, Buenos Aires, 1990
5. Borges, Jorge Luis, Jurado, Alicia; *¿Qué es el budismo?* Editores Colombia, Buenos Aires, 1976
6. Mónegal, Emir Rodríguez; *Borges, una biografía literaria*, Tierra Firme Fondo de Cultura Económica, S. A. México 1987
7. Sucre, Guillermo; *Borges el poeta*, Monte Avila Editores, Caracas 1967
8. Woscoboinik, Julio; *El secreto de Borges*, Editorial Trieb, Buenos Aires, 1988
9. -----; *Borges y la literatura*, Universidad de Murcia, 1989
10. -----; *Borges en diálogo* Grijalbo S. A. Buenos Aires, 1985
11. アウグティヌス『告白』岩波文庫
12. 秋山英夫『今はなめらかに風いで』朝日出版社
13. ガイスマー, エズウアー『キルケゴールの宗教思想』東海大学出版会
14. 梶山雄一『空の思想』人文書院
15. シュウェグラー, アルベルト『西洋哲学史』岩波文庫
16. ショーペンハウエル, アルトユール『意志の表象としての世界』中央公論社
17. 同上『愛と生の苦悩』人文書院
18. スピノザ, ベネディクト, デ『エチカ』岩波文庫
19. 兵頭高夫『ショーペンハウアー論』行路社
20. レービィット, カール『ヘーゲルからニーチェへ I』岩波書店
21. 湯田豊『ニーチェ「反キリスト」』晃洋書房